2014年 9月5日号(62号)

未来への扉

高等特別支援学校 支援部

市島町土砂災害　復旧ボランティア報告

２学期の始業式のあった９月１日は、「防災の日」でした。９１年前のこの日に関東大震災が起きたことと、この時期に台風の襲来が多くなることから、１９６０年に制定されたもので、毎年８月３０日～９月５日が、「防災週間」となります。過去の災害で被害に遭われた方々への追悼とともに、過去の災害から学び、現在を生きる私たちが、未来の災害への備えをおこたらないよう、確認する日でもあります。

特に今年は８月に入ってから、台風や大雨による被害が多くあり、各地でたくさんの方がお亡くなりになりました。心より哀悼の意を表しますとともに、一日も早い復旧・復興を祈念申し上げる次第です。

今回の「未来への扉」は、本校の生徒・職員にも被害のあった、８月１５日からの大雨による、兵庫県丹波市市島町で起きた土砂災害の復旧ボランティアについて、参加した支援部員二名による報告です。

報告①

２学年支援部　藤本　祥邦

私は生まれてから今まで大きな災害の被害に直接的にあったことはありません。阪神淡路大震災、東日本大震災、そして今回の台風・豪雨被害と思い返すだけでも、多くの災害が身の回りで起こりました。阪神淡路大震災が発生した際、私は小学生でした。実家がある場所に被害はなかったものの、親戚がいる神戸へ車で向かうと道路が割れ、衝撃的な光景であったことを覚えています。東日本大震災では、大学時代に卒業旅行で行った場所が大きな被害となりました。「どうして」という思いと同時に、災害の恐ろしさを目の当たりにしました。そして、今回の豪雨被害です。主に、丹波地域で大きな爪痕を残しました。ボランティアとして活動できたことは、本当に微々たるものだったかもしれません。一日も早く復旧復興することを願うばかりです。

今回のボランティアで強く感じたことは、災害を身近なものだと捉えることの大切さです。防災対策を考える上で「自助・共助・公助」という考え方があります。自助とは、自ら(家族も含む)の命は自らが守ること、または備えることです。共助とは、近隣が互いに助け合って地域を守ること、または備えることです。そして公助とは、区をはじめ警察・消防・ライフラインを支える各社による応急・復旧対策活動のことを指します。今生きていることに感謝の気持ちを忘れず、常日頃から防災意識を高めていくことが、私たちにとって今すぐできることなのではないかと感じました。様々な学習活動もそうですが、経験を積むことで知識は定着していきます。家庭で避難所や防災マップを確認しておくことだけでなく、地域の防災訓練に参加するなど、共に助け合っていく姿勢を育てていくことが大切です。災害はいつ起こるか分かりません。しかし、起こった際にどういった行動をとるかという事は事前に準備しておくことはできます。

災害が発生したときに重要なのは、「自分で考えて行動する」ことだと思います。そのためには、一人ひとりが、防災・減災に対する正しい知識や、いざというときに対応できる判断力を持つことが大切です。子どもたちはもちろんの事、私たち大人も再度意識を高めていく必要があるのではと感じます。支え合って生きていくことの大切さを噛みしめ、災害を身近なものと捉え、命があることへの大切さを忘れないように過ごしていきたいと思いました。

報告②

３学年支援部　野村　聡

私が参加したのは災害発生から２週間ほど経過したころです。市島町には、市民グラウンドのほかに、「スポーツピアいちじま」という野球場もありますが、どちらも土砂や岩石、倒木、被災材（災害によって被害を受けた家財や建材など）が、いくつも山のように積まれ、その山の間で土木作業用の機械が休みなく働いている、という状態でした。この時期は、山なみの緑もまだ勢いのある頃ですが、その緑がまるで引き裂かれたようにして、赤土のむき出しになる場所が何か所もあり、大雨によってあちこちの山の土砂が崩されたことが見てとれました。

現場は、すでにたくさんのボランティアの方々によって、泥や土、岩石の多くが運び出されていましたが、それでもやることはたくさんあります。建物というのは、中さえきれいになればいい、というものではありません。今回のような土砂災害によって、基礎と呼ばれる土台の部分に泥や湿気が残ってしまうと、家を支える部分の木が腐って、家全体がだめになってしまいますから、畳や床板をすべてはがして、泥や水を残らずぬぐい取らねばならないのです。たくさんの人が、床下をのぞくようにかがみこみ、手に持った道具で地道に泥をかき出したり、ぞうきんで柱をぬぐったりする、動きの少ない、根気のいる作業に取り組んでいました。中には、ひざ下ほどの高さしかない床下のすき間の暗闇に、全身を泥だらけにしながら数メートルももぐりこんで、泥をかき出す人もあります。うかがうと、その方は六十代の男性で、「僕のような小柄なもんやないと、入りにくいやろ」と、なんでもないことのようにおっしゃるので、本当に頭が下がりました。

昼食をとる時、来るまでの道のりで見た、山々の土砂崩れの跡を思い返して、気づくことがありました。今回崩れていたのはすべて、杉が人工的に植えられた部分だったのです。色々な種類の木が、自然に生えているような場所では土砂崩れは起きていない。そのことを確かめようと、現場の裏山に

《裏面へつづく》

《表面からのつづき》

上がってみると、やはりそこでも崩れていたのは、杉林の斜面でした。もちろん、様々な条件が重なってのことでしょうが、その一つの原因として、一種類の木しか生えていない斜面は、色々な木の根が入り組んだ斜面よりも崩れに弱い、ということがあるのではないか、と思えました。

さらに確認すると、現場の後方には山があり、山の中腹には、ため池がありました。このため池から流れる小川にそって下りると現場のある集落です。見ると、この山の頂上付近の二か所で大規模な土砂崩れが起きていて、それが、ため池の地点で合流しているのですが、今回の場合は、入り組んだ山の形状と、このため池が、砂防ダム（土砂災害をへらすために作られたダム）の役目をはたしていたことがわかりました。ため池は、そこに土砂をためる代わりに水をはき出すことで、クッションのように、大量の土砂や岩石、倒木をすべて下流に流してしまうことをふせいでいたのです。結果、流れた土砂の量がおさえられ、この現場でもたいへんな被害に遭ったものの、家ごと押し流される事態はまぬがれた、ということのようでした。土砂や岩石、倒木を一手に引き受けたため池は、すでに池の形ではなくなっていました。

近隣の方も、長年この土地に住まれていて、今回のような災害に遭ったことはなかったそうです。異常気象と言われますが、特に今年は台風と大雨が重なって、山が水をふくみ、これまでにない状況を生み出したのでしょう。

「想定外」という言葉も飛びかうこの頃、何が幸いして、何が災いするかは、誰にもわかりません。しかし、最悪の事態に備えることと、起きてしまった事態に向き合う姿勢は、どんなに時代を経ても、変わりがないように思います。私はその日、福井県から１５人、朝来市から１０人程、丹波市のＡＬＴ（外国人の英語の先生）４人、本校関係者７人、現場の方々、あわせて４０人以上の汗と笑顔のはたらきぶりから、人と人とが支えあう姿のおおもとを見たように思いました。それは、「支援」という言葉になる前の、思わずさしのべられた手のような、人情とでも言うべき心のありようでした。